

## つながりを目指した日本語教育実践

### —ハンガリーを事例として—

相川 弓映

#### 要 旨

ハンガリーの日本語教育の一端を担った筆者の実践報告である。筆者は、学習者と学習リソースのつながりを目指して教育実践を行ってきた。具体的には、日本語のクラスでは、SNSを活用し、学習者と学習者、学習者と情報のつながりを目指した。また、「しゃべりゅんく」という日本語交流会やプレゼンテーションコンテストの実施により、学習者と母語話者のつながりを目指した。

#### キーワード

ハンガリーにおける日本語教育 つながり 学習リソース

### 1. はじめに

筆者は2014年7月から約2年間、国際交流基金からハンガリーの首都ブダペストに日本語専門家として派遣されました。派遣が決まった時、最初に思ったのは「ハンガリー…ハンガリーといえば…何だろう？」というのが正直な感想でした。多くの日本人にとって馴染みが少ないであろうハンガリーで、どのような教師や学習者が、どのように日本語教育／学習に関わっているのか、イメージがわかりませんでした。その後現地へ赴き、熱心に日本語教育／学習に取り組む教師や学習者に、幾度となく出会いました。ハンガリーでの日本語教育の一端を担った筆者の実践報告を記すことで、ハンガリーにおける日本語教育のエンパワーメントとなることを期待しています。

### 2. どのような日本語教育実践を目指すか

ハンガリーにおける日本語教育実践を始めるにあたり、何を目指し、教育実践を行っていくべきか考えました。筆者には派遣期間があり、数年単位の長期的計画で教育実践を行うことはできません。言い換えれば、たった2年の間で何ができるのかを考えなければなりません。そして、筆者の派遣終了後、筆者とともにハンガリーから消えてしまう成果ではない何かを目指すべきだと考えました。

2012年に国際交流基金が行った機関調査によると、ハンガリーには約1600人の日本語学習者がいます。学習者の多くは、日本のアニメや漫画といったポップカルチャーをきっかけに、日本語学習を始めています。また、合気道や空手、剣道といった武道を習い始め

たことで興味を持ち、日本語学習を始めたという学習者にも少なからず出会いました。上述の機関調査によると、ハンガリーにおける教育機関数は 28 あります。そのほとんどは首都ブダペスト近郊に位置しています。従って、地方在住の日本語学習希望者は、独学で日本語を学ぶことが多いようです。「多いようです」というのは、国際交流基金が行っている機関調査では、教育機関に属した学習者の数を示しているため、独習者の数を把握することはできません。ですが、日本を紹介するイベントを地方で開催すると、開催のたびに必ずと言っていいほど、独学で日本語を学んでいるという学習者に出会いました。「これまでインターネットで日本語を勉強してきました。日本人と直接話すのは初めてだからうれしい。」と声をかけてきた学習者もいました。一方で、日本語学習を始めたいけど、どうしたらいいかという質問も毎回のように入りました。

インターネット技術が発達した現代、インターネット上には多種多様な学習リソースがあります。人的リソースである日本語母語話者や、学習者仲間とつながることもできます。しかしながら、全ての学習者、または学習希望者が、自身の希望する学習リソースにつながれるとは限りません。そこで、人と人を、人と情報を、つなぐ日本語教育実践を目指すようになりました。学習者が筆者とだけつながった場合、筆者の帰国に伴い、つながりは消えてしまう可能性があります。しかしながら、学習者が自身の希望する学習リソースにつながることによって、自律して、継続的に学習が続けられるのではないかと考えました。

### 3. 「つなぐ」仕事とは

筆者が派遣された国際交流基金ブダペスト日本文化センター（以下、JFBP）は、ブダペストの中心地にあります。JFBP の日本語講座では、学生や社会人が日本語を学んでいます。筆者は、JFBP 日本語講座のコーディネートを主な仕事としていました。JFBP 日本語講座の一週間のスケジュールは下記の表のようでした。

表 1 JFBP 日本語講座の一週間

月～木	金
17 : 10～18 : 40 日本語クラス	【月 1 回】 しゃべりゆんく かるたクラブ 文化紹介講座
19 : 00～20 : 30 日本語クラス	

月～木は日本語クラス、金は月 1 回の単発講座や交流会などの活動を実施していました。これらのクラス、活動が円滑に実施できるよう、計画を立て、実施・運営するのがコーディネーターの役割といえます。以下では、つながりを目指した実践を紹介していきます。

#### 3.1 SNS を利用したつながり

JFBP の日本語クラスでは、これまでも SNS による交流はクラスによって行われていま

した。クラスによっては、授業外も活発に交流があるクラスもあり、そうでないクラスもありました。そこで、学習者同士のつながり、また学習者と情報のつながりを目指し、各クラスに SNS によるグループページを作成しました。なお、クラスのすべての学習者が参加する必要はなく、参加していない学習者が不利益を受けないように配慮しました。また、各クラスの担当教師には、教師が書き込むためのものではなく、学習者にも積極的に書き込んでもらいたいという意向を示しました。そして、学習者が書き込みやすい雰囲気作りも行ってもらえるよう、依頼をしました。

SNS グループは、クラスが始まったばかりの頃は、教師からの連絡事項が書き込まれることが多かったです。例えば、「×月△日はお休みです」「来週は〇〇をします」といった内容です。しかし、次第に学習者からの書き込みも増えていきました。書き込みは自然に増えたわけではなく、上述のように書き込みやすい雰囲気作りが功を奏したと思います。授業中に作成した成果物を SNS 上でシェアしたり、学習リソースの紹介を行ったり、おもしろい記事をシェアしたりといった書き込みを教師が行うことで、少しずつ学習者も書き込むようになりました。学期が進むにつれ、学習者が見つけた学習リソースをシェアしたり、学習者自身が作った日本語クイズをシェアしているクラスもありました。また、日本語クラスで作成した成果物を、日本人の知人に紹介し、そのフィードバックをクラスの SNS でシェアしているクラスもありました。

クラスの SNS グループは、学習者と学習者をつなぎ、学習者と情報をつなぐことができました。更に、学習者自らが考えながら書き込みをする行動につながっていったといえるのではないのでしょうか。

### 3.2 日本語交流会「しゃべりゅんく」によるつながり

ハンガリーには、語学留学、音楽留学をする日本人学生が一定数います。英語圏に比べると在ハンガリーの日本人は決して多くありませんが、きっかけさえあれば日本語学習者が、日本人と交流することも難しいことはありません。しかし、この「きっかけさえあれば」が最も難しいといえるでしょう。

そこで、日本語を通じ、つながる場を提供することを目指し、「しゃべりゅんく」という交流会を開始しました。「しゃべりゅんく」は、日本語の「しゃべる」をハンガリー語の動詞三人称の語尾変化形風にした名称です。名称通り、おしゃべりをする会です。交流会には、JFBP で日本語を学んでいる学習者だけではなく、日本語で話したい人ならだれでも参加可能としました。在ハンガリーの日本人、大学や高校または独学で日本語を学ぶハンガリー人が主な参加者です。また、ハンガリーを旅行中の旅行者や、フランスやイタリアから来ている在ハンガリーの日本語学習者が参加することもありました。「しゃべりゅんく」では、毎回テーマがあります。これまで、「おすすめの観光地」「好きなスポーツ」などのテーマを設けてきましたが、テーマは初対面者同士が話し始めるきっかけを作る役割をしています。「しゃべりゅんく」では 90 分の交流の中で、3 回の席替えを行います。着席直後には、テーマに沿った会話が聞こえてきますが、時間が経つにつれ、テーマとは関係ない話が展開していきます。場合によっては、連絡先の交換が始まることもあります。コーディネーターである筆者はその様子を見守ることに徹します。

「しゃべりゅんく」を始めた当初、筆者の役割は大きかったといえます。会場作り、テーマの提供、会話が途切れがちなグループのフォロー、遅刻者への対応、席替えの連絡、片付けといった役割がありました。しかしながら、1年が経過した「しゃべりゅんく」では、そのほとんどを参加者が行っています。会場作りや片付けはさることながら、遅刻してきた参加者には「しゃべりゅんく」の参加者がフォローをしてくれます。初めての参加者にも、「しゃべりゅんく」のやり方を教えてくれます。上述のクラス SNS グループだけではなく、「しゃべりゅんく」でも参加者である学習者が自ら考え、行動を起こすようになりました。

### 3.3 プレゼンテーションコンテストによるつながり

近年、さまざまな国で日本語スピーチコンテストをインターネットで配信することが増えています。スピーチコンテストを、その場だけで収束させず、外に発信する試みだと思われれます。お国柄に富んだスピーチをその場に行くことなく聞ける興味深い活動といえるでしょう。しかし、そのほとんどは発信が目的となっているようで、コメントのやり取りができないもどかしさがありました。

そこで、やり取り、つまり発信先とのつながりを目指したコンテストの実施を考えました。ハンガリーについて発信することを目指し、ハンガリーを紹介するプレゼンテーションを競うコンテストとしました。

プレゼンテーションコンテストは、インターネット配信をし、閲覧者は自由にコメントを書き込めるようにしました。いただいたコメントは、できる限りコンテストの場で紹介をし、コンテスト参加者へのフィードバックとして用いました。筆者が派遣された2年間では、計画、そして第1回目の実施までを行うことができました。しかし、プレゼンテーションコンテストが広く認知され、定着するまでには至りませんでした。今後、プレゼンテーションコンテストが広く認知され、閲覧者が増えた場合、コンテスト参加者と閲覧者をどのようにつないでいくのでしょうか。今後のつながりを楽しみにしています。

## 4. つながりの先にいる相手

ここまで、つながりを目指した実践について報告を行ってきました。しかし、最初からつながりを目指していたわけではありません。上述の通り、派遣前にはハンガリーのことを何も知らず、何を目指して良いのかもわかりませんでした。多くの人の話を聞き、良い結果が得られるかもしれないことを少しずつ実践していった結果が、つながりだったように思います。クラス SNS グループも、「しゃべりゅんく」も、思いがけず学習者自らの積極的な行動や発信につながっていきました。なぜこのようにつながっていったのでしょうか。学習者は、つながることで相手が見え、相手が見えることが更なる具体的な行動につながっていったようでした。

国際交流基金が発行している『日本語教授法シリーズ』では、コミュニケーションの相手を想定した教育実践をすすめています。第6巻『話すことを教える』では、「実際に話す行為をするときには、ふつうは聞き手（聞いている人）がいます」（下線は筆者）（p. 4）

のように実際のコミュニケーションに基づき、聞き手を想定するように述べています。また、第8巻『書くことを教える』では、「学習者がただ1つ1つのことばや文法を正しく書くことだけに集中しすぎないように指導していかなければなりません。(中略)『書くこと』はコミュニケーションの1つだからです。」(p. 8)と述べています。日本語教授法について書かれたこのシリーズ本で、このように明示されているのは、これまでの日本語教育がコミュニケーションの相手を想定していなかったからといえるのではないのでしょうか。つながりを目指した結果、学習者にはつながりの先にいるコミュニケーションの相手が明確に見えたのかもしれませんが。

## 5. おわりに

ハンガリーから帰国し、派遣の2年間で振り返ってみると、本当につながりを求めた日々だったように思います。人と人、人と学習リソースをつなぐにはどうしたら良いか考え続けました。そして、考えることで、私自身多くの人とつながっていったように思います。なぜなら、多くの現場に足を運び目を向け、多くの人の話に耳を傾けなければ、考えをまとめることはできなかったからです。改めてハンガリーとのつながりに感謝しつつ、本稿を終えたいと思います。

## 参考文献

- 国際交流基金 国別の日本語教育情報 ハンガリー (2014年度版) <<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/hungary.html>> (2016/12/09 閲覧)
- 国際交流基金 (2007) 『国際交流基金日本語教授法シリーズ 第6巻「話すことを教える」』ひつじ書房
- 国際交流基金 (2010) 『国際交流基金日本語教授法シリーズ 第8巻「書くことを教える」』ひつじ書房
- 嶋田和子 (2010) 「企業・大学・行政・地域をつなぐ日本語教育」『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』ココ出版、pp. 139-150

(あいかわ ゆみえ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)